2020年5月10日発行（毎月1回10日発行・発売）

www.skinet.jp

SKI GRAPHIC

DVD

石水克友
コブの
かんたん
練習帳

栗山太樹
ポジション
エクササイズ

5
Magazine for person who loves skiing
月刊スキーグラフィック
May*2020
No.491

技術選トップスキーヤー THE SESSION in 白馬八方尾根

2020の俺たちの滑りをここで披露する

12年ぶり男子総合を制した日本大学
東海大学、リレー初優勝

秩父宮杯・秩父宮妃杯
第93回全日本学生スキー選手権大会

インターカレッジレポート
Inter College
REPORTS

主催：公益社団法人全日本学生スキー連盟
公認：公益財団法人全日本スキー連盟
期日：2月24日～27日
会場：秋田県鹿角市・花輪スキー場
秋田県仙北市・たざわ湖スキー場（スーパーG）

土谷守生＝文と写真

去る2月24～27日、秋田県鹿角市・花輪スキー場で第93回全日本学生スキー選手権大会が開催された。本大会に先立ち2月13日に同県仙北市・たざわ湖スキー場でスーパーGが行なわれた。今大会は、新型コロナウイルスの流行、記録的な雪不足など緊張感が漂う中での開催となったが、競技は各大学の名誉をかけた熱い戦いが繰り広げられた。その中で学校対抗戦の男子は日本大学、女子は早稲田大学が他大学を圧倒して優勝を飾った。

雪不足で心配されたが、１種目男女合わせて約１５０人が滑り２種目で３００人、さらに１種目２本滑るので６００本滑ることになり、果たしてバーンは持つのか、という声もあった。しかし、多くの関係者の杞憂はいっぺんに吹き飛んだ。大会のコース係のほか各大学のコーチ、監督などすべての関係者がコース整備に加わり、硬く締まった素晴らしい大会バーンを作り上げたのだ。そのすべての関係者が作り上げたコースを、選手たちは母校の名誉をかけて急斜面に突っ込んでいった。

関係者が整備したバーンは600本の激走に耐えた

大回転

亀渕哲平が東洋大学2人目のアルペン優勝

コースは、22日に行なわれたワールドカップにいがた湯沢苗場大会でのGSLコースに似た急斜面、緩斜面、そして急斜面、最後は中斜面といった変化が多く技術レベルの差がはっきり出るテクニカルコース。雪は少ないが、地元花輪スキー場の協力で硬いバーンができあがった。

男女ともスノージャパンに所属する選手が出場、中止になったワールドカップにいがた湯沢苗場大会の回転に出場する予定だった若月隼太(近畿大)と竹内力音(日体大)の2人。レースはこの2人を中心に展開されると思われたが、ノーシードから1本目上位につけた富良野出身の亀渕哲平(東洋大)が、見事に下馬評を覆して優勝。東洋大学史上、2009年にスーパーGを制した長沼敬晴以来アルペン2人目、大回転では同大学初の優勝という記録を達成した。

大回転コースプロフィール

スタート地点	700m
フィニッシュ地点	355m
標高差	345m
旗門数	男子1本目38/37(ターニングゲート) 男子2本目40/38(ターニングゲート) 女子1本目38/37(ターニングゲート) 女子2本目キャンセル
セッター	男子1本目生田康宏/女子杉山裕彦 男子2本目相原博之/女子キャンセル

女子1位 石島瑤子(早稲田大)

男子1位 亀渕哲平(東洋大)

女子は、スノージャパンに所属する富井雪奈(東海大)、若月新(東海大)と実力者、石島瑤子(早稲田大)との争いとみられたが、1本目石島がラップ、富井は3位につけた。しかし、2本目がはじまる前から雪が猛烈に吹き付けて視界がきかなくなり2本目はキャンセルとなり、1本目でレースは成立。石島が逃げ切って1年の時に回転で優勝して以来2度目の優勝を飾った。

回転

野沢温泉出身の「富井」が男女そろって制覇の快挙

大回転で約150人(300本)が滑ってもびくともしなかった大会バーンは、回転でも硬く締まったコースを提供してくれた。そのハードなコースに飛び出した男子1番スタートの富井大賀(中央大)が、急斜面もスキーを下へ向けて飛ばし、ただ一人43秒台をマークしてそのままラップタイムをマーク。富井は2本目も30番スタートのハンディをものともせず正確なスキー操作でラップタイムを奪う完勝、2位の竹内力音(日体大)に1秒29の大差で優勝をかざった。

女子の1本目ラップタイムをマークしたのは男子と同じ1番スタートの田村みのり(慶応大)だった。スノージャパンに所属する富井雪奈(東海大)はラップタイムに0秒42差、逆転を狙うぎりぎりの差だ。慶応義塾大学が優勝すれば1965年第38回大会の滑降で優勝した丸山仁也以来2人目、女子では初という快挙になる。

2本目はさすがにバーンが荒れはじめたが、それでもコースには多くのスタッフが張り付き、アルペン最後の競技をベストな状態で戦ってもらおうと気合が入る。そんなコース係の期待に応えようと2本目一発を狙ってガンガン突っ込んでくる。その中で富井は、0秒42のハンディなら逆転できると、しっかりスキーをたわませてポールのインを突く。急斜面も落とされることなく乗り切り、この時点でトップに立つ。1本目セカンドラップの松本なのは(早稲田大)は届かず、30番スタートの田村を待つ。優勝を意識したのか田村は、最後の急斜面で何度も落とされ、富井に2秒以上の差をつけられて6位に沈んだ。女子はスノージャパンに所属する2人がワンツーを決めた。

奇しくも男女とも優勝したのは富井姓で、しかも出身が同じ野沢温泉村。同地で宿を営み中央大学のコーチとして参加している富井正一さんは雪奈の父親。「野沢温泉の乱ですよ」と狂喜していたのが印象的だった。

回転コースプロフィール

スタート地点	530m
フィニッシュ地点	355m
標高差	175m
旗門数	男子1本目52/51(ターニングゲート) 男子2本目53/52(ターニングゲート) 女子1本目50/49(ターニングゲート) 女子2本目55/53(ターニングゲート)
セッター	1本目男子相原博之/女子杉山裕彦 2本目男子生田康宏/女子相原博之

富井雪奈(東海大)

富井大賀(中央大)

スーパーG

男子は日本大学の藤吉、女子は早稲田大学の西村が優勝

本大会に先立ち、13日、秋田県仙北市・たざわ湖スキー場で唯一のスピード系種目スーパーGが行なわれ、男子は日大の藤吉廉、女子は早大の西村紗英がそれぞれ優勝を飾った。

●男子大回転

順位	選手名	所属	1本目	2本目	合計
1	亀渕哲平	東洋大学	54.95	57.53	1:52.48
2	若月隼太	近畿大学	54.89	57.67	1:52.56
3	仲保一樹	明治大学	55.47	57.39	1:52.86

●女子大回転

順位	選手名	所属	1本目	2本目	合計
1	石島瑤子	早稲田大学	51.48	51.48	0:00.00
2	齊藤実祐	法政大学	51.54	51.54	0:00.00
3	富井雪奈	東海大学	52.30	52.30	0:00.00

●男子回転

順位	選手名	所属	1本目	2本目	合計
1	富井大賀	中央大学	43.29	46.04	1:29.33
2	竹内力音	日本体育大学	44.23	46.39	1:30.62
3	石島裕一郎	早稲田大学	45.06	46.40	1:31.46

●女子回転

順位	選手名	所属	1本目	2本目	合計
1	富井雪奈	東海大学	43.16	48.06	1:31.22
2	若月　新	東海大学	43.18	48.37	1:31.55
3	松本なのは	早稲田大学	42.82	48.81	1:31.63

●男子スーパーG

順位	選手名	所属	1本目
1	藤吉　廉	日本大学	44.97
2	高橋大成	中央大学	45.08
3	久保田拓	早稲田大学	45.12

●女子スーパーG

順位	選手名	所属	1本目
1	西村紗英	早稲田大学	45.69
2	五十嵐紫乃	慶応義塾大学	45.70
3	押切　葵	日本大学	45.77

大回転コースプロフィール

たざわ湖スキー場国体コース

スタート地点	1075m
フィニッシュ地点	725m
標高差	350m
旗門数	080m 男子27/25(ターニングゲート) 女子27/26(ターニングゲート)
セッター	男子相原博之/女子杉山裕彦

藤吉 廉(日本大)※写真は大回転

西村紗英(早稲田大)※写真は大回転

大会トピックス

東海大学がリレーで初優勝

東海大学といえばアルペンのイメージが強いが、学校対抗戦の〝華〟ともいうべきリレーで初優勝を飾った。ノルディックチームを指導するのはコンバインドのオリンピアン、森敏コーチ。優勝の瞬間、ゴールエリアで胴上げがはじまり、選手たちから「森コーチ、森コーチ」と大声で呼ばれ、照れながら輪の中へ入った森コーチは高く何度も何度も宙を舞った。その森コーチにおめでとうと声をかけると「ありがとうございます」といった声が震え、目頭を熱くしていた。

また、相原博之監督も、思ったようにポイントを伸ばせなかった今大会だったが、最終日のリレーの優勝で喜びが爆発、「うれしいですよ。選手がよくやってくれました」と4人の選手の健闘をたたえた。

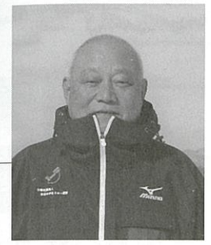
東海大学走者

1走/西本ひのき(1年)区間5位
2走/佐藤　凌(2年)区間2位
3走/北出竜之介(1年)区間1位
4走/後藤大成(4年)区間1位

リレー初優勝の東海大学。左は相原監督、右は森コーチ

学連会長に聞く、今後の運営と選手育成強化

interview



若月 等
全日本学生スキー連盟会長

理事のあり方、新しい運営を模索

――新型コロナウイルスの感染渦が日本列島に広がるというタイミングでの開催となりましたが、感染対策はどのようにされていましたか。

若月会長（以下敬称略） 大会開始前は、まだ国から自粛要請はなかったのでキャンセルは考えていませんでした。しかし、感染者を出さないよう万全を期するために大会に参加する各大学には衛生面の注意、そして仮に発熱などの兆候が出た場合の行動、指示系統、地元の保健所の電話番号などの文書を送付しました。人が集まるのを避けるために開会式と閉会式、それに彬子女王にご臨席いただいて実施する予定だった優勝旗の返還などの行事も中止させていただきました。もちろん運営スタッフや本部、選手が宿泊するアルパスの各所にアルコール消毒液を配置し、人の出入りの多い本部にはマスクも用意しました。

――その新型コロナウイルスに加えて歴史的な雪不足もあって大変厳しい大会になりましたね。

若月 この雪不足は日本だけではありません。イタリアやフランスなど世界的に雪が少なく、FIS（国際スキー連盟）もワールドカップ、コンチネンタルカップの開催に苦慮しています。ここ花輪スキー場も記録的な雪不足に見舞われていますが、幸いにもアルペン、ジャンプ、クロスカントリーの各会場とも大会の運営に差し支えないよう関係者が最善を尽くしてくれて大会終了まで持たせてくれました。地元の皆さんにも大変ご尽力いただきました。

――かつて学生の日本一が日本一（全日本選手権の優勝）、そしてその選手がオリンピックや世界選手権に出場するという〝学連最強時代〟がありました。学連の現状と強化の方向性を教えてください。

若月 そうですね、1960年代、1970年代には強い選手がたくさんいました。しかし、当時と今では根本的に違うのはかつては3000人いた選手が今は1200人に減少していること、つまり選手層が薄くレベル差が大きくなっているためトップレベルで切磋琢磨する部分が希薄になっていると思います。それとかつては学生の年齢が選手としてのピークという時代もありましたが、今の世界の傾向はピーク年齢が27～29歳前後と高くなっています。学生の19～22歳くらいの年齢では世界進出の予備軍的なポジションにあると考えていますので、ジャパンチームへ送り込みそこから本格的な世界チャレンジをする、という時代に変わってきていると思います。ですから、学生時にしっかり下地をつくるということに注力したいと考えています。

――現在、スノージャパンに所属している選手は何人いますか。

若月 男子では小山陽平、若月隼太、竹内力音、相原史郎の4選手、女子は前田知沙樹、富井雪奈、若月新の3選手です。スノージャパンのメンバー数の中では少ない方ではないと思います。相原は現在ケガをしており、この中から本大会には若月、竹内、女子の富井、若月新の4選手が出場してくれています。近年の実績では、東洋大学時代の安藤麻がワールドカップの大回転、回転とも2本目に進出しており、リザルトを残しています。2018年の冬季オリンピックの代表にも選ばれています。男子の小山陽平も今シーズン、ワールドカップ出場3戦目にして2本目に進出しており、確実に学連として力をつけていると思っています。

――会長就任5年目になりました。組織として今度どのような取り組みをされるのでしょうか。

若月 これまでの理事は1部校中心で構成されてきましたが、推薦理事を増やしていきたいと考えています。それには下部の学校の方にも、また学連を広い目で見られる方にも参加してもらい、時代に合った新しい学連を作り上げたいと考えています。それと今の体育会スキー部とは別に「学連クラブ」といった競技ではなく基礎スキーの分野にも力を入れたいと思います。これは少子化で部員が減少し、スキーというスポーツが衰退しているなかで、活性化を目的としたものです。SAJの全日本技術選にも学連推薦で出場できるようなことも模索していきたいと考えています。このほかモーグル、スノーボードの会員登録、マーケティングも今まで以上に注力しなければならないと思います。

――今、マーケティングという話が出ましたが具体的にどのような活動をされるのですか。

若月 学連スキー部のOB、OGが企業人として活躍していますが、たとえ少ない金額でも広く集めることで強化費を捻出していきたいと考えています。

――厳しい環境の中で行なわれた大会でしたが振り返ってみて感想をお聞かせください。

若月 新型コロナウイルスと雪不足という大変厳しい条件の中での開催でしたが、スキー場の皆さん、ボランティアの学生たち、そして組織委員会のメンバーの皆さん、各大学の監督さんたち皆さんが置かれている立場をよく理解してくれて運営することができました。今までの大会で一番神経を使いましたが、大変満足のいく内容だったと思います。この後、SAJの公認大会が3月22日まで中止や延期をされ、出場を予定していた学連の選手にも厳しいシーズンとなってしまいましたが、目標を失うことなく精進してほしいですね。

――ご多忙の中、本日はありがとうございました。

ジャンプ競技

彬子女王がご臨席、クロスカントリーのスターターを務める

クロスカントリー競技

会場にはこんな人もいました

ジャンプの金メダリスト原田雅彦さん、クロスカントリーの夏見円さん。ともにSAJの理事だが、同組織の中にある情報・医科学部の担当として来場。今回はアンチ・ドーピングに関するアンケート調査を行なっていた。会場では選手以上に大会を見に来ていた人が2人を見つけて記念撮影にサインにと大人気だった。

夏見 円さん

原田雅彦さん

選手の活躍を支えるサービスマンの存在

選手の活躍を陰で支えるサービスマン。
この大会では2人のフリーサービスマンにスポットを当てた。

現スノージャパンの男子サービスマン金田健氏にアドバイスを受け、チューンナップファクトリーT.C.S.でチューンナップの経験を積んだ。現在、サロモンの地域、国内サービスマンとして活動、昨年からサロモンチームのメインサービスを担当している。FISファーイーストカップを中心に国内主要レースでサロモンスキー使用選手のレーシングサービスを行なっている。

工藤雅和さん

雪質に合わせてワクシングする

サービスマン歴13年の須合さんは、サロモンテクニカルスタッフを経て同社に入社、アフターサービス勤務からサービスマンに転身。その後K2スキーを3年、アトミックのサービスマンとして10年、現在はチューンナップショップ、アクティブFに所属しながらフリーのサービスマンとして活動。今大会にはロシニョールのサービスマンとして使用選手を支えた。

須合紀之さん

エッジの最終仕上げをする